

ということ——が、そのまま人間である「私」について言いうることとなっていることが指摘できる。さらに定式化するなら、「神」を主語に置いて言いうることがすべて「私」を主語にして言えるようになること——つまり「私が」言えるようになること——、これが、十字架のヨハネが「人間の神化」という事態に見ようとしていたことだった、ということになる。こうした「神でありうる主体」という人間把握の意義をあらためて哲学的にとらえ直すことがなされてよい、という課題を提出して提題の結論としたい²³⁾。

〈意見〉

宮本 久雄

本年のシンポジウムは「西方キリスト教における神秘思想」をめぐって御三方（鶴岡氏、阿部氏、田島氏）が提題された。本意見は特に田島氏の提題および筆者の問いに氏が解説された「検討し残した問題」とに関わる。

氏は三一的ペルソナの区別を超える父なる神の一性から始める。一性とは「最初の産出するもの」であり、神は始原から終局において、つまりその一性において同じ働きを通して永遠と時間において働く。言いかえると完了した神の恩恵の働きは、今正に着手されている。これが救済論的原事実の核心である。その原において人間は「神の一なる全的な実体の像に則して」造られている。人間はすでにキリストと同じ神の子であり、長子・養子の区別もない。つまり魂の始原的一から一への回帰が現成する。他方で「魂における神の子の誕生」は受肉に基づき歴史のうちで現成する。そこではこの神の像がおおわれて見えない現況に人は生きている。つまり像は罪によって覆いかくされている。罪とは、諸々の幻像を作像し、その幻想を自分（のもの）と見なす自我（eigenschaft）の虚無的働きである。この無明・虚無の闇に人は現的に生きるが、そこに父なる原が働く。エックハルトの説教では、この原と原からの乖離的事態に神の恵みが言葉

23) 十字架のヨハネの神化論における特徴の一つは、小稿で紹介したいくつか箇所にも見てとれるように、美が神と人との合一が成る場所であり媒体となっていることである。神化（人間の完成）は美において・美のなかで（en hermosura）成就する。このことも十字架のヨハネの神秘思想の重要な哲学的テーゼであるが、小稿では指摘するに留める。

として現成したとされる。それは突破という実践と連動する。魂は突破により幻像から浄められ神の像（神の子の誕生）を見出し、再び原的一へ回帰する。だから説教はこと（言即事）なのである。魂は現的状况を生きる。

本意見は如上のようにいわば強引に大略田島氏の提題を理解した。それは結局どうということか。「魂における神の子の誕生」が父なる一性において原的にすでに一性への回帰として現成していると同時に、罪におおわれた魂の闇における一性への回帰的突破として現的に着手されていることといえよう。その着手はこのわが身に起きていることである。そのことはわが身において自覚され、突破に迫られている。とすれば、一歩進めてエックハルトのような人に関わる提題を聞くことは、同時に提題ということがわが身に生起するということなのである。それはさらにどのようなことか。ことは言葉と自己に関わる。すなわち、一から一への永遠にして原的で現（時空）的な働きは、日常言語は言うに及ばず学的論理、記号言語などの言葉によっては近よれないのであろうか。これが一つ。次にその言葉を操り、エックハルトを説示しようとする人間の自己自身が、幻像・罪におおい隠されている破綻からどのように離脱しうるのか。これが二つ目。それでは幻影的現的自我を自覚し、そこから突破し原的一性に回帰するにはどうしたらよいのだろうか。本意見が唯一語りたいことは、その方策はエックハルトの言葉（学的論文あるいは説教に働く言葉）だということなのである。

筆者は、場違いかもしれなかったのだが、田島氏に道元の修証一等を引き合いに出して問うた。それは修行と証悟が間髪をいれずに一なることであるのと同時に、無明の闇の無限の深さにおいて仏がどのように働きかけ救済するのかという問いである。この問いは、今回の田島氏の原的にしてかつ現的な、人間と父なる一性と乖離と一性への回帰と深く共鳴すると思えたから発せられた。正に修証一等において修行してもしても無明の闇中にあるこの身にとって、修証一等という言葉こそ仏の手であり、それ以外の突破口はありえないという曙光が漸く射し入る。確かに如上の仏教言語は、中世哲学会の言語的質疑応答にそぐわないかもしれない。しかしそういう言葉を借用する以外にわたしにとって田島氏の提題に応じ、その内実に迫ることはできなかった。これは問いの言語的スタンスの自覚に深く関わる。そのことを自覚させていただいた田島氏の提題に深く感謝を申し上げたい。
